64. 「陸奥の吹雪」について

問 軍歌「陸奥の吹雪」はいつ頃作られたものか。また、歌詞の第6章第3行目の「背嚢銃床[1]たきつれど」が、昭和12年頃の歌集では「背嚢などをたきつれど」となっているが、原作はどうなのか。

答 この軍歌は、明治35年1月23日青森の歩兵第五聯隊210名の混成中隊が、八甲田山[2]に雪中行軍を行った時、山中の劇しい吹雪と寒気のため、その大半199名の犠牲者を出した惨事[3]を悼んだものです。気仙沼出身の国文学者落合直文がこの長詩を作詞したのは、この重大ニュースが報ぜられた直後のようです。そして好楽居士[4]〔仮名〕の作曲で、まだ捜索活動たけなわの明治35年2月22日、東京牛込の文宝堂からいち早く出版[5]されたものです。なお、この行軍には宮城県出身者が48名も参加していますので、郷土的な大事件でもありますが、今まで郷土的なものとして採り上げ[6]た文献はありませんでした。

原作の歌詞は次の通りです。

1. 白雪涙く降りつもる　　八甲田山の麓原
吹くや喇叭の声までも　　凍るばかりの朝風を
物ともせずに雄々しくも　　進み出でたる一大隊

2. 田茂木野村を後にして　　踏み分け登る八重の坂
雪は益々深くして　　橇も動かぬ夕まぐれ
詮〔せん〕なくここに露営せり　　人はつららの枕して

3. 明くるを待ちて又更に　　前へ前へと進みしが
み空の景色もの凄く　　忽ち日影かき暗し
行くも帰るも白雪の　　果は道さへ失ひぬ

4. 雪降らば降れ我々の　　勇気をここに試しみん
風吹かば吹けさりとても　　行く処まで行きてみん
さは云へ今は道も無し　　哀れ何処ぞ田代村

5. 君の為には鬼神も　　取りひしぐべき丈夫〔ますらお〕も
国の為には火水にも　　入らば入るべき武夫〔もののふ〕も
今日の寒さは如何にせん　　零度を下る十八度

6. 身を切るばかり寒ければ　　又も露営と定めしが
薪木〔たきぎ〕のあらぬを如何にせん　食のあらぬを如何にせん
背嚢銃床たきつれど　　そもまた尽きしを如何にせん

7. 雪のこの夜の更けゆきて　　寒さは愈々まさりたり

凍え凍えて手の指の　　見る見る落つる者もあり
神いまさぬかあなあはれ　　命迫れり刻〔とき〕の間に
8. 居ながら死なんそれよりは　　何処〔いずこ〕へなりと行きて見ん
山口少佐を始めとし　　二百余人の武夫〔つわもの〕が
別れ別れて散り散りに　　辿り行きけり雪の路
9. ウラルの山の朝吹雪　　吹かれて死ぬるものならば
シベリア原の夜の雪　　埋もれて死ぬるものならば
笑〔えみ〕も含みてあるべきに　　ああ哀れなり決死隊
10. ここの岩間の岩かげに　　はかなく斃れしその人を
問ひ弔〔とぶら〕へばなまぐさき　　風徒〔いたず〕らに吹き荒れて
恨みは深し白雪の　　八甲田山の麓原

この軍歌は、詞曲ともにすぐれていたので、その後軍隊では勿論、民間でも永く愛唱されてきました。第6章の問題の個所は、軍国調がエスカレートしつつあった昭和の初期に、武器尊重の精神に反するので軍が改変したものです。さて、この惨事が陸軍省に電報で報告されたのが1月28日で、新聞には30日付から報道されています。その中、2月1日付国民新聞の記事に『……背嚢を焼き銃を燃やして僅かに暖を得れども二日間の酷寒には早くも凍死者を出すこと多く、眠らず、暖らず、中には食せざる者ありて……』とあり、その他地元新聞にも同様の記事があります。まことに言語に絶した極限状態の中で、常識では律することのできない、例えば銃床を焼く事実のあったことは、生存者の後日譚としても伝えられ、後に発見された遺品の模様からも確認されています。

注(1)　古来の陸奥は、白河と勿来〔なこそ〕以北の地域「みちのく」といわれた大国であったが、明治元年12月7日、磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥の5か国に分けた。「大日本地名辞書」（吉田東伍）では、新陸奥は陸前・陸中に対し「陸後」〔りくご〕とすべきであったし、さもなければ「りくおう」と読んで旧陸奥と区別すべきであると記しているが、新陸奥も古来の陸奥と同じく「むつ」と呼ばれた。新陸奥国の大部が青森県の県域である。なお、同時に出羽国は羽前・羽後の2国〔「両羽」という名数で総称〕に分けられた。

注(2)　青森県の中部にある火山。那須火山帯に属し、最高峰大岳は1,585*m*。各所に温泉があり、冬期間は豪雪にとざされる。十和田湖、奥入瀬渓流の風光美で知られ、十和田八幡平国立公園の一部をなしている。

注(3)　対ロシア関係が緊迫しつつあったので、軍は寒地作戦を想定し、将兵の訓練強化に努めていた時期であった。特に寒国の第8師団は、雪中の露営や演習の徹底的な訓練実施を命ぜられた。その一環として行われたこの雪中行軍が、いたましい事故をひき起してしまったのである。明治35年1月23日、歩兵第5聯隊第2大隊の2、3年兵の中から選抜して臨時に編成された210名の部隊は、雪中露営の目的を以て、八甲田山に向った。早朝6時半、

降雪の中を青森市郊外筒井村の兵営を出発して18粁の行軍を続け、その夜は田茂木野村の奥の森林中に雪中露営をした。翌24日午前4時ここを出発して豪雪の山中に入ったが、猛烈な吹雪と零下20度を下る寒気に前進をはばまれてしまった。止むを得ず青森に引返すこととし、北へ帰路を取り火打峠附近で昼食をしたが、その後は猛吹雪に巻かれて全く進路を失い、雪中を彷徨するだけだった。疲労し切った一行は、その夜は雪穴を掘って露営、〔前夜露営地の西半粁地点〕したものの、燃料は尽き果て凍死寸前の危機が迫ったので、止むなく背嚢・銃床等を焚いてわずかに暖をとる有様だった。しかし、それも束の間のことで、25日午前2時、このまま凍死を待つよりはと、露営地を発して北に向った。吹雪は益々激しさを増し、寒気はいよいよ烈しくなって、遂に山口少佐が仮死状態に陥り、終に夜明けまでに37名の兵士が凍死してしまった。このようなきびしい状態の中での部隊の進退は絶望と判断した中隊長は、最後の決意をきめて部隊の編成を解き一同に自由行動をとらせるに至った。この地点は、前夜露営地の北1粁、八甲田前岳の北斜面で、青森の南17粁、標高733mのところで、現在遭難碑の建っている地点であった。分散した隊員は、ちりぢりとなって下山しようと努めたが、吹雪の猛威の前には如何ともし難く、極度の疲労と寒気のため、続々と斃れて行った。神成大尉の命を受け、原隊へこのことを急報するため青森に向おうとした後藤伍長〔宮城県栗原郡姫松村出身〕も、猛雪の中をさまようだけで力尽き、雪中に直立したまま昏睡に陥ってしまった。26日一行の安否を気づかって救援に向った一隊は、翌27日になって雪に埋もれ半死半生となっていた後藤伍長を漸く発見した。雪中に不動の姿勢を保った伍長が救出作業の目標となったのである。その地点は、今後藤伍長の銅像が建っている田代平〔たしろたい〕高原である。いよいよ遭難の事態を知った原隊では、28日から全力を挙げて捜索を開始した。この捜索活動は引きつづき5月28日まで続行されたが、参加隊員210名中生存者わずか11名という悲惨事で、しかも救出された11名中完全治癒者は唯の3名に過ぎなかった。なお、一方同一条件下において、殆ど同時に実施された弘前歩兵第31聯隊の福島小隊37名、従軍記者1名の行軍露営訓練が、同様の猛吹雪の危険に抗して、計画通り完遂している。最も慎重入念な準備と、周到十分な装備とがその成功の鍵であった。この部隊は、第5聯隊の遭難現場に近接して通過行軍している。しかし、この事実は厳秘とされ、60年を経過した近年になって明るみに出た。第5聯隊遭難に関する資料には、「八甲田遭難記」（歩兵第5聯隊編「遭難始末」の抜萃版、陸上自衛隊第9混成団刊）・「遭難始末」（歩兵第5聯隊）・「吹雪の惨劇」（小笠原孤酒）、小説的な「八甲田山死の彷徨」（新田次郎）等がある。

注(4) 本吉郡松岩〔現在は気仙沼市松岩字松崎片浜197〕の邑主鮎貝太郎平盛房の次男として、文久元年〔1861〕11月15日〔戸籍謄本によった。別に11月22日生の説がある〕。幼名亀治郎〔戸籍謄本記載の名であるが、別に亀次郎・亀二郎と記したものもある〕盛光といっ

た。仙台元寺小路中教院に学び、国学者落合直亮〔なおあき〕の養子となった。明治10年17才の時伊勢神宮神教院に入学、また養父の師の堀秀成にも学んだ。明治15年東京の帝国大学に古典講習科が創設されると同時に入学したが、17年徴兵のため退学した。兵役中にも研鑽を怠らず、20年除隊の時には、既に国語・国文学で一家をなしており、皇典講究所・国学院・第一高等学校に国文学を講じた。歌人として萩の家と号し、明治25年浅香社を起して和歌の刷新に努力し、その門弟から与謝野鉄幹・尾上柴舟・金子薫園等の逸材を輩出した。明治36年12月16日、本郷駒込浅嘉町の自邸に於て、43才の若さで歿した。著に、「日本文典」「日本文学全書」「日本大辞典 ことばの泉〔後の言泉〕」等多くのものがある。郷里気仙沼市観音寺境内に、その歌碑がある。

一つもて君を祝はむ一つもて

親を祝はむ二もとある松　　直文

と自筆が刻まれている。細長い自然石で高さ2.8 *m*。昭和10年12月16日33回忌に建てられたものである。また生家煙雲館の庭園にも自筆を刻んだ歌碑がある。

おくところよろしきを得ておきおけば

みなおもしろき庭の庭石

高さ約2 *m*の大谷石の碑で、昭和28年12月16日50年忌に建てられたものである。傍らに実弟鮎貝槐園の歌碑がならぶ。

注(5)　「定本日本の軍歌」(堀内敬三）に『仮名の人だが曲の形式がキチンと三部分形式になっている点や、音階が「ヨナ抜キ」型長音階と俗楽陽音階とを巧に折衷してある点が注目に値し、曲節もよくできているので誰か相当の名ある人であったろうと思われる。同題材の曲に「雪紛々」〔ゆきふんぷん。添田阿蟬坊詞）・「雪中行軍の歌」(大和田建樹詞）・「吹雪の敵」（井上松雨・河井酔茗詞、田村虎蔵曲）があるが、軍隊でその後長く歌われたのはこの落合直文ので、詞曲ともに優秀であると思う』。

注(6)　参加者を出身府県別にすると、岩手144、宮城48、青森6、山形3、秋田2、北海道1、東京1、神奈川1、長野1、熊本1、石川1、佐賀1、総員210名であった。宮城県出身者が約5分の1以上の多数を占めているにかかわらず、郷土的な文献に記されたものがないので次にその氏名を掲げておく。これは、霞目陸上自衛隊東北方面航空隊本部の高橋顕氏が精査されたものである。

小山田　新（仙台市）	小野軍之助（遠田郡南郷村）
渡辺幸之助（刈田郡福岡村）	浅野金右衛門（登米郡米山村）
千葉文之助（登米郡石森村）	鈴木　清男（栗原郡藤里村）
近藤留三郎（栗原郡沢辺村）	小野寺熊治郎（栗原郡松倉村）
鈴木与四郎（栗原郡富野村）	○高橋　房治（栗原郡小野村）

高橋　他一（本吉郡気仙沼町）
浅野　佐吉（登米郡米谷村）
菅原　梅作（本吉郡気仙沼町）
高橋　彦市（栗原郡高清水村）
千葉　宗平（登米郡石越村）
小野寺熊三郎（登米郡石越村）
宍戸五郎左衛門（登米郡南方村）
熊谷　運蔵（本吉郡新月村）
千葉勘三郎（登米郡宝江村）
高橋　多蔵（栗原郡鶯沢村）
千葉慶三郎（登米郡石森村）
鈴木清左衛門（栗原郡金成村）
後藤陽五郎（登米郡南方村）
小野寺辰之進（本吉郡新月村）
白鳥新兵衛（栗原郡築館町）
斎藤安右衛門（栗原郡清滝村）
氏家善四郎（栗原郡宮沢村）
佐藤吉内（栗原郡長崎村）
◎後藤房之助（栗原郡姫松村）
及川篤三郎（登米郡新田村）
柴山　捨治（栗原郡有賀村）
三浦　十吉（本吉郡十倉村）
大場　喜作（栗原郡築館町）
二階堂富十郎（登米郡上沼村）
渥美　貞亮（登米郡米山村）
田中　善治（登米郡登米町）
佐藤　富蔵（登米郡米谷村）
伊勢　浅治（登米郡米谷村）
金田　陽治（栗原郡金田村）
小野寺庄右衛門（本吉郡松岩村）
加藤八重治（本吉郡新月村）
猪股源太郎（登米郡宝江村）
後藤庄三郎（栗原郡鶯沢村）
佐藤正右衛門（栗原郡大沢村）
春日林太夫（登米郡宝江村）
清野幸太郎（本吉郡気仙沼町）
三塚市右衛門（登米郡新田村）
村松　文哉（牡鹿郡渡波村）

○は救出後死亡　◎は生存者

資料　萩野家遺稿（落合直文）
落合直文集（落合直文）
定本日本の軍歌（堀内敬三）

〔この回答を採り入れ　ＮＨＫが制作したテレビ番組「八甲田の証言」が、昭和46年６月９日仙台中央放送局から東北管内に向けて放送された。その後昭和48年発行された「近代東北庶民の記録」（ＮＨＫ仙台制作グループ著）に、これが収録された。〕

65.　日本フィギュア・スケート発祥の地

問　五色沼が、わが国フィギュア・スケートの発祥の地と聞きましたが、それはどうしてですか。